ヤンデレパートナー。

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヤンデレパートナー。

【Ｎコード】
Ｎ７００２Ｏ

【作者名】
キラワケ

【あらすじ】
「付き合ってください！」と顔を真っ赤にして告白してきたのは、迷う余地なき美少女でした。長い黒髪しなやかでちょっと小柄で可愛らしいそんな彼女が告白してきた事実に、何故に自分なんかと？
かなり困惑しました。なりゆきで付き合い始めてみてると、なんというか周囲の目線が変なんです。友人に尋ねてみると震える声で言いました「コウタ……そいつぁヤバい」と言うと友人の広野君は倒れてしまいました。更に尋ねると「彼女は危険だ」と言い残すと、何かに追われるように逃げ出すと離れた場所から断末魔が聞こえま

した。次々と倒され・消されていく友人に恐怖を覚えていると「……邪魔者は除けましたからっ」と、なんとも可愛らしい笑顔で恐ろしいことを言う、僕に告白してきて付き合いはじめた彼女がそこには居たのです。

エピソード1　ランチタイム

昼食の出来事。
教室で一つの机を二つの椅子を使って、僕とアキさんは昼食を食べていた。

「はい、あーん」
「あーん」

こうしてアキさんは僕におかずを箸で口へと運んでくれる。恋人どうしの「あーん」というものだ。
少し恥ずかしい気もするけど……ぱくりもぐもぐ……美味しい、うん。

「はい、あーん」
「あ、あーん」

本当にアキさんの手料理は美味しいなあ。
ばくりもぐもぐ……しっかし頻度が高――

「はい、あーん」
「あ」

でも、少しスピードがはやいかな？
ぱくもぐ……殆ど租借できてないや。

「はい、あーん」
「ちょっと待ってアキさん」
「！」

「少しゆっくり食べられると――」

そう言った途端にアキさんは悲しそうな表情へと、先程までの嬉しさに満ちていた顔を変えて、

「そうですか……私の料理は食べられないほどに――」

「いやいや、それは思い切り誤解だよ！　美味しいって！」

本当にそれは誤解だった。美味しいことこの上ない、食は進むけれども、少しペースを考えてほしいと思うだけで――

「……すみませんコウタさん。気を使わなくていいんですよ……」

「気を使ってなんか！」

「いいんです！　こんなマズイ料理を作る私なんて、喉に箸を貫通させてしまえばいいんです！」

「エグイって！　そんなことやめてよアキさん！」

それは確実に死んじゃうから！

「……そうですか、見た目がエグくなればいいのですね」

「いや、そういうことじゃなくてさ」

「今から箸を鼻から――」

「結局エグいじゃないか！」

どう足掻いてもエグイ！

「ど、どうしましょう！」

「しなくていいから！　アキさんの料理はとっても凄く素晴らしく大変美味なんだけど、ちょっとペースが早かっただけなんだよ！」

早口ながらも説明する、なぜなら……アキさんが今にも箸を喉に入れ始めていたから。

「……そうなのですか？」

「うんうん、とっても美味しかったよ」

笑顔をつくって答える。するとアキさんも箸を下ろして、安堵の表情へ変わる。

「……私はなんて勘違いを」

「そうだよ。アキさんの手作りのお弁当は本当に美味しいよ、いつもありがとう」

お礼を言うタイミングがなかなかなくて、遅かったと思うけど。言えてよかった。

そう感謝していた直後に、アキさんはまた表情を変えて、どこか失望したような無表情に。

「私に……私にコウタさんの食べるペースが分からないなんて」

「し、仕方ないって」

自分のペースって、人それぞれだもんね。

「仕方なくありません！　これでは彼女さん失格です！　私はこのまま背中を強く打って脊髄を損傷してしまえばいいんです！」

「その後がエグいよ！　やだよ……アキさんが寝た切りなんて」

そのエグイ自分の罰し方に、悲しくなった。その後を想像すると、とてもとても――

「コウタさん……手間が増えてしまいますものね。私なんて介護していたら大変でしょう――そして、きっと私は捨てられるのでしょうね」
「そんなことないよ！　例えアキさんが寝た切りでも、一生付き添って生きて行くよ！」

僕はアキさんが心のそこから好きで、アキさんがどんなに変わっても僕は好きで居続けるつもりだった。

「……！　今から寝た切りになります」
「いやいやいや！　望んでない望んでない！　僕は出来るならばもっとデートとか――」
「……！　もう少し生きてみます」
「うん。もう少しってのが気になるけど……良かった」
「では、お弁当の続きを――」

キーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴った。ああ、惜しい事したなぁ。アキさんの料理とっても美味しかったのに……

「……チャイムを鳴らしたのはどこのどいつですか」
「いやアキさん？　そんな物騒な鉈なんか構えて何を、というか何処から――」
「二人の時間を邪魔しないでくださぁぁぁぁぁい！」
「いや！　チャイムに罪はないから！　待ってアキさん……というか振りまわしながらいかないでください！」

ああ、生徒が……生徒が鉈に当たって吹き飛ばされてる！？　ああ！　広野君、相澤君大丈夫――

＊　＊

――ええと、ということで先程のアキさんが僕の彼女です。それで僕はアキさんの彼氏です……えへへ。
ちょっと噛みあわなかったり、勘違いで暴走したりするけど……それも僕のことを思ってのことなんです。
アキさんはとても可愛らしいんですが――俗に言う”ヤンデレ”というものみたいで、本当のことを言うと少し苦労してます。
それでも、彼女の傍に僕は居たいと思っています。それほどに僕は彼女、アキさんが大好きなんです。

そして、これから話すことはそんな僕とアキさんの日常です。

エピソード2　席替え

それはロングホームルームのある日のことです。
月に一回はクラスでの長い自由時間であるロングホームルームを利用して席替えを行っています。
アキさんと付き合い始めたのが四月の終わりの四月二十九日で、五月にさしかかる前日である四月三十日金曜のロングホームルームに席替えが行われることになりました。

「（少し恥ずかしいけど、アキさんの近くの席だといいな）」

そんな希望を胸に、僕は当日の席替えの時を迎えるのですが。

「（ああ……やっぱり）」

くじ引き。至極、厳正な決め方です。

「（でも僕はくじ運がないからなあ）」

商店街での福引では残念賞であるティッシュより一歩手前の醤油の小瓶だけが何度も当たったし、遠足のバス席では毎回酔いやすい後部座席。
懸賞が当たったことは一度もなく、友人が少ないというのに今までの席替えでは遥か彼方へ飛ばされ、それも廊下に面した場所の柱部分。
あまりくじ引きでいいものを引き当てた記憶はなかったりする。

「（というかアキさんと付き合えたことで、もう一生分の運を使い果たしたんじゃ――）」

そう思ってくじ引きを行う為に席を立って、教卓の前へとやってきます。

「あ、ちょっと待て」

これを引けば、と言おうとしたところで強面の担任教師に呼び止められて手をその空中で硬直させてしまいます。

担任教師は袋の中身をじっと確認します、あまりシャッフルがされていなかったのでしょうか？

それでも、何故か担任教師の表情は強面とはまた違って強張っているようにも思えます。

「……先生？」

「だ、大丈夫だ！　よし上野引け」

「あ、はい」

言い忘れていましたが僕は上野コウタです。

背は平均的で、細っこく影が薄めで特徴の無く冴えないのが僕です。

「き――」

「九番だな、よし」

僕の引いた紙を速攻見たのか、すぐに席をあらわす表の書かれた黒板に名前が書かれていきます。

ちなみにこのクラスは三十六名で、六×六の席配置になっていて、僕は前から三番目窓側から二番目の位置。

黒板も見やすいし、悪くない席だと思う。

「じ、じゃあ姫城」

ちなみに……え、えと僕の彼女は姫城アキさんと言います。

長い黒髪しなやかで少しつり上がった黒い瞳とちょっと小柄で可愛らしいそんな彼女さんです。

「はい」

一番前の席という、教師に近ければ指名率もおのずと高くなるこの位置はあまり好きではありません。そんな席に戻って、見えるアキさんの姿を横から見ます。

「（本当に彼女が僕の彼女さんなんて信じられないや）」

やはり彼女は少し小柄ではあるのですが、かなりの美人さんなのでした。

昨日の今日のことで浮かれ過ぎかもしれませんし、もしかしたらお遊びでした――なんて発想が浮かんでくる辺り、僕は相当なネクラです。

そう悪い方へ悪い方へと発想が行き始めたその頃でした。

「コウタさんっ、お隣ですよ！」

「え、そうなの」

内心かなりに喜んでいますが、恥ずかしいですからつい抑えこんでしまいます。

しかしその間にも彼女は気付かぬ内に沈んでいって――

「……私が隣じゃダメだったのでしょうか」

それに少し涙目です。え、なんでという感想の前に、ちゃんと僕の意見を――

「嬉しかったですよ！　ぼ、僕もアキさんの隣に座れて嬉しいです」

「よ、よかったぁ……」

安堵するアキさんも可愛らしく、見惚れてしまいます。このまま毎日彼女を近くで見ていられると考えると、嬉しさがこみあげてきて仕方がありません。

「……」

ただふと顔を上げた先に見えた担任教師が少し青ざめていたのは何故なのでしょうか？

こうしてアキさんは僕の右隣の席になりました。

＊　＊

六月の初めです。

ロングホームルームの金曜に合わせて、また席替えの時です。

「（あー……もしかしてこれでアキさんが隣にいる生活も終わりかなあ）」

そう思うと今行われるであろうこの席替えが、少し残念です。

しかし、奇跡は起きるもので――

「コウタさん、また一緒の席ですね！」

「本当だ！　すごい偶然だね！」

位置こそ、前から四番目廊下側から三番目へと変わりましたが右隣にはアキさんがいます。

「嬉しいです。これからも……よ、よろしくお願いします」

「こちらこそです」

こうしてまたアキさんが右隣にいる学校生活が再スタートしました。

少し気になってはいたのですが、担任教師が青ざめていました……温度変化が激しいですから風邪でしょうか？

＊　＊

七月の初めです

またこの時が来てしまいました。

「（今度こそ終わりだよね）」

三度も、こんなに幸せな事は続きません。そう分かってはいるのですが、

「（せめて近く席でありますように）」

と願ってしまいます。しかしその願いは裏切られました――いい意味で。

「コウタさん、一緒です！」
「びっくりした！　本当に一緒だね」
「はい……運命を感じます」
「う、うん」

運命なのかもしれない、普段ネクラな僕がそう思ってしまう程のラッキーでした。
こんなことがあっていいのだろうか、何か悪いことの前兆なのだろうか――そう思う事さえ忘れて喜んでしました。
ああ、夏休みまで短いけれどずっとアキさんと一緒なんだ……と考えて胸が熱くなります。

「これからもよろしくね、アキさんっ」
「はい！　コウタさん！」

ちなみにこの日は担任教師は休みでした、前日から体調が悪そうでしたね。
そういえば今代理で来ている副担任もどこか、調子が悪そうですね……顔も青ざめていますし。

エピソード3　登校風景

朝……

僕は朝日で目を覚ますと直後に目覚ましがジリリと鳴った。

「少し得した気分」

目覚ましよりも早起きな僕は布団から這い出ると、居間に向かった。

歯を磨いて、顔を水で洗って、朝食を摂って、学生服に着替えて。

「行ってきまーす」

僕は後ろ手に玄関の扉を閉じると、家を出る。すると門の前に見慣れた顔が見えた。

「ユイ、おはよ」

短髪に栗色の髪を切りそろえ、僕と同じ背丈ぐらいで、垣間見える白い歯をキラリ輝かせて太陽のような笑みを向けながら、あいさつ。

「おはよっー、コウちゃん！」

彼女ことユイは、僕の幼馴染だ。

「コウちゃんにまさか彼女なんてねー」
「僕自身も驚きだよー」

ユイは登下校を共にするぐらいに仲が良く、それが十年近く続いていた。
ユイと知り合ったのは小学校の入学式の時で、それからは家も近くでずっと親子共に仲がいい。

そして僕には彼女が出来た。小柄で綺麗な黒髪で……そう、突然に僕に告白してきたのだった。

「突然だったもん、ビックリしちゃったよ」
「本当突然だったよね、いきなりコウちゃんが『僕、彼女が出来たんだ』って言って来てさ……何かの前触れなんじゃないかと思っちゃった」
「何も起らないってば」

失礼だなあ。僕は何気なく、あることを聞いてみた。

「そういえば、ユイには好きな人とかいるの？」

純粋な興味だった。どちらかというとスポーツ系なユイはどんな人が好きなのかなあ、と。
野球部の前田君とかサッカー部の岡部君みたいな人かな？

「うーん、いるよ？　でもコウちゃんには教えない」
「勿体ぶるなぁー、僕に教えないってことは僕に関係のある人かな？」

すると、友人の広野君だったり？　まさか、それは驚きだなあ。

「うん、すっごい関係あるかな？」

隣のユイが見せた意地悪そうな笑顔の中に、僅かに悲しさがあったのを、長い付き合いの僕は見逃さなかった。

……聞いちゃいけなかったんだ。ごめんね、ユイ。謝られるのが嫌いなユイには口に出さず、心の中で合謝罪した。

「もうすぐだよ」

「あ」

そう話している内に学校へと着く頃だった。するとユイは、

「あ、じゃあ先にいくね」

「うん、またね」

ユイは直前まできて、校門が見えるところまで来るとそう言って先に駆けて行っていた。

「（気を使ってくれるん……だよね）」

校門前には、小柄な彼女が待ってくれている。

「おはよう、アキさん」

「あ……おはようございます、コウタさん」

これが僕の登校風景。でも……気のせいかな。アキさんの表情が強張っている気がしたのは……？

昇降口まで行くまでの道のりで、彼女は話しかけてくる。

「コウタさん」
「なに？」
「コウタさんは美桜さんと仲がよいのですね」

美桜、ちなみにユイの名字がその”美桜”で。美桜ユイ。

「うん、幼馴染なんだ」
「そう……なのですか？」
「言って無かったかも、ゴメンね。ユイは――」
「いえ、それはいいのですけど……そうですか」

隣に見る彼女の瞳何か暗い何かを見たのは気のせいであってほしかった、だから僕は無理に苦笑をする。
そういえば……僕のちょっと前までのことについて話してみようかな？
幼馴染のユイとの日常と、アキさんと付き合うことになった経緯まで――

エピソード―2　僕の日常

僕は篠井幸太。今年、高校一年生を迎えました。
運動も勉強も中途半端。成績は中の中から中の上を彷徨っている。
背丈は一メートルと六十センチほどで、体重は四十キロ。髪は前髪がいつも額にかかってしまうぐらいには伸びているのが常。
趣味は風景画を描くこと。まあ、でも人に見せられないものじゃないんだけどね。
人物画は……書くと「生気がない」と言われる、少しこのジャンルは苦手なのかもしれない。
それでも僕は日曜になると、風景画を描くために外に繰り出したりする。僕は絵が描くことが好きだった。

家族構成は両親二人に僕一人の三人家族。いわゆる一人っ子と呼ばれるものなのかな？
特に過不足なく、富裕でも貧乏でもなく。至って普通の家庭ではあると思う。

平日の朝、学校に行く支度を済ませて玄関に来ると、

「気を付けるのよー、コウちゃん」
「もー、だから高校生だからその呼び方は止めてって……行ってきまーす」

母さんは、未だに僕へそんな呼び方をするのだった。いい加減にして欲しいのだけど、治る気配がない。
家を出ると、いつも見慣れた顔が待っている。

「おはよー、ユイ」
「おはー！　コウちゃん」

……こっちも同じで呼び方は治らないのだけど、もうあだ名みたいなので諦めた。

「ねーねー聞いて聞いて！」
「なに？」
「昨日の体育の授業でね、野球があって――」

美桜結衣。彼女は僕の幼馴染で……これはもう話したかな？
そう紹介らしきことを内々でしていると、ふいに後ろから視線を感じた。

「？」
「それでねー、で――ってどしたの？」
「いや……多分僕の気のせいだと、思う。ごめんね、続けて」
「うん、そう？　じゃあね、だから――」

僕は実を言うと、これが”気のせいではないことを知っている。振り向いた直後に電柱へと、何かから隠れるように黒髪が逃げて行くのを見た。
一度だけなら、きっと見間違えで良いのだと思う。でも、でもだ。

もう、中学を卒業してから。高校に入ってからほぼ毎日、そんな気配を感じてしまうのだ。こんな登校だけではなく、学校内でも。
確かにその黒髪は最初こそ見えなかったけども、慣れ始めて振り向くのに躊躇がなくなると……ほんのさ先だけだとしても、僕には見えてしまうのだ。

「（……一体なんなのかな？）」

僕は少なくとも何にも目立ったことはしないから、恨みを買われることなんてないと思ってるんだけどなあ。

その気配の主のことで分かるのは、それは長い黒髪で小柄だということだけだった。

「なーなー、コウタコウタ」
「見たかコータ？　あの”奇想天外アメアラレ”」
「見たよー、昨日の良かったよね」

僕には友人がいる。特に話す機会の多いのが広野君と佐藤君だ。コウタと何故か”ウ”を強調するのが広野君で、コータと伸ばすのが佐藤君。

バラエティ番組とかからネットで拾ってきたニュースなども話題にあげては会話を繰り広げる。

「どもー、きちゃいまいた！　コウちゃんと周りの男子共っ」
「ひでーな、広野って名字があるのに」
「……そこは名前を主張すべきじゃないかな」

と僕はツッコミを入れておく。

「何の話ししてたの？　あ、もしかして”奇想天外――」
「おー、美桜も見たのかー。どうだったよ？」
「えーとね――」

ユイはこうして、二つ別クラスを挟んだクラスからわざわざやってくるのがいつものことで。
中学の時もそうだったし、同じのクラスの時は話題を求めて駆けてきたし。
一回「もしかしてユイって友達いないの？」と聞いてみたのだけど。
「そうなんだよ……って失礼すぎるよね？　私には友達の百人や一億人いるよ！」と単位が凄まじいことになっていたのだけど、いることにはいるらしい。
というか僕が何度か体育の授業でユイが他の女子や男子と話しているのを目撃しているのでそれはないだろう。
「それでも、なんで？」と聞くと「な、なんとなくだよ！　いいじゃん、なんだかんだで話し易いのはコウちゃんなんだから」と怒られ軽く頭にチョップを入れてきた。
いや……軽いつもりなのかもしれないけど、結構痛いからね？

「？」
「どしたー、コーター？」
「なんでもないよ佐藤君。というか伸ばすとモーターみたいになっちゃうね……」

これもある気配だった。でも教室の中では、僕には検討も付かなかった。
でも確かに授業中も感じることがあるから、恐らく同じクラスの人なのかなとは思うのだけど。
……相談？　するわけないよ、だって僕は対して迷惑してないしね。あとはネタにされそうだからちょっと……ね？

授業が終わって、僕は机に突っ伏していた。同じ教科の授業が二連続も続くなんて、色々とマンネリすぎる。
更には昼休み一歩手前なだけあって、精神的な疲れがどっと押し寄せてきた。そうウダっていると、目の前の机前を通り過ぎる際に、女子生徒が生徒手帳を落としたのが見えた。

「あのー、落としましたよー」

落とし主の女子生徒を呼びとめると、彼女は振り返った。

「！」

彼女は小柄だった、僕よりも二十センチほど小さいだろうか？
長いストレートで前髪を横に切りそろえ、黒髪は腰ほどまであるというのに手入れが行き届いているようで、艶やかさに満ちていた。
制服を替えさえすれば、自己申告をしなければ中学生に見えなくもない、そんな彼女は。

美少女と言う言葉が似合っていた。
なぜ、こんな可愛い子がこの学校にいたことに気付かなかったんだろうと、思うほどに。
きっと笑顔が似合うんだろうな、などということを数秒で思いめぐらせているのを一旦止めにして。

「御親切に」
「いえいえ、はいどうぞ」
「ありがとうございます――篠井コウタさん」
「うん、って……僕の名前――」

そう言う頃には彼女は去って行った。

「誰だったのかな……」

この頃に、彼女のことは気になりだしていた。

そして”あの”気配がなくなっていることに僕は気付くことは無かった。

エピソード－1　涙と笑顔と

さっき生徒手帳を拾った女性が気になって仕方なかった。
なんというか……一目ぼれというヤツなのかな？　あの休み時間以降、彼女のことが気になって仕方なかった。
心なしか胸の鼓動も早く思える。

「（なんなんだろう……この気持ち）」

とりあえず名前も知らないなんて、色々と失礼なんじゃないかと思ってしまった。少なくとも彼女は僕の名前を、それも何故かはわからないけれどフルネームで知っている。
調べる術が直接聞く以外にない今、授業中にさりげなく振り向いて彼女を探した。

「！」

僕が彼女を見つけると、彼女もこちらに向いて笑顔で小さく手を振った。
すぐに向き直って、

「（か、かわいい……）」

彼女の笑顔は思った以上の衝撃だった。なんというのだろう、華やかというわけではないけれど、優しい……温かな笑顔だった。
その笑顔を反芻している内に、授業はあっという間に終わってしまっていた。

休み時間。
確か授業の始まりの時に校庭を見たらユイが走っていたので、おそらく体育授業明け。着替えや次の授業の準備でこのクラスに足を伸ばす時間はないと思う。

「あのさ、広野君」
「どしたコウタ？」
「あのね、ちょっと気になることがあって」
「なんだよ？　気になるってあれか、もしかして女か？」
「えっ」

ば、バレるのはやいよ！？

「う、うん……」
「おー、コウタにも青春の一ページか……俺は何ページもめくってるはずなのにな、未だにウウッ」

広野君は見かけはいいのにね、何故か女の子と付き合っても直ぐに別れてしまうのだった。

「そ、それでね……えーっと見える？　髪の長い黒髪の子なんだけど」

僕がチラリと目配せするように、休み時間でも一人座る彼女を指すと。
何の前触れもなく広野君の顔がみるみる青ざめていった。まるで何もなく健康だったのに、突然「手の施しようがありません」と医者に言われた時のよう。そんな経験僕も彼らにもないけどね。

「ああ……長野か、うん……イインジャナイカナ」

広野君は突然カタコトになって言った。でも僕にはそれは些細なことでしかないので……長野、さんかあ。

「そうなんだ！」

「あ、でもコウタ……ッ！？」

広野君は僕が背にしている長野さんの方を見て、顔をひきつらせて。

「どうしたの？」

僕もつられて振り返ると、そこには笑顔の長野さんがいた。

「あ……やっぱり長野さんは可愛いなあ」

「確かに可愛い……可愛いが……アアシヌ」

突然広野君が白眼をむきだしたけど、些細なことでしかないので……長野さんかあ。

そうして後に「長野（ナガノ）　秋（アキ）」という舐めであることを教えてもらった。

その時の広野君は、青ざめて膝をがっくりと落として様子が少し変だったけれど、些細なことでしかなかった。

＊　＊

「し、しのいくぅんっ！」

突然休み時間を迎えた教室で、授業終わりで次の教科の準備をしているとそんな慌てたような焦って噛み噛みになってしまったかのような可愛いい声が近くから降ってきた。
見上げると、僕が気になって仕方なかった――長野アキさんだった。

「え、僕？」
「そう……です。あ、あの……ちょっと来てくれませんか？」
「え、うん。いいけど」

なんだろ……僕は彼女のことが気になっていたけど、彼女は僕に何のようなのかな？
そうして長野さんに弱弱しく制服の袖を引っ張られながら教室を出た。

そこは、体育館裏だった。
少し先を歩く長野さんは何故か、耳まで真っ赤になっていた。

「えーと……長野さん？」
「私の名前……覚えてくれたんですね」

嬉しそうに、そして少し涙ぐみながらそう言った。

「ど、どうしたの長野さん！」
「ごめんなさい、嬉しくて……」

涙を拭いながら笑顔を見せる彼女は……あまりにも魅力的だった。

「それで……長野さん？」
「私は……篠井コウタさんにお話したいことがあるんです」
押し迫った、緊張した物言いだった。さっきの呼びだした頃の彼女とはまったく違う――噛みもせず、しっかりとした口調で、真剣な眼差しで。
「……はい」
僕はそんな彼女に気圧されて、そんなことしか言えなかった。
彼女は深呼吸をして、落ちつけて、目を開いて、僕を一直線に見つめて。
「私は……長野秋は……篠井幸太さんが……好きですっ！」
それは告白だった。
気になっている彼女からの、勇気を振り絞っての告白。
顔を真っ赤にして、その答えに怯え震える彼女を待つのは……ひどく辛いことだった。
だから、僕は――
「はい」
そう、答えた。もっと言葉を選んで、並べられれば良かったのに。
でも彼女は、彼女はボロボロと涙を流しながら”笑顔”でこう言

うのだ。

「ありがとう……ございます。これから私を……よろしくお願い……します」

涙に濡れる笑顔は今までに見たどんな笑顔よりも。綺麗だった。可愛かった。美しかった。

そう、僕はこんな僕には。長野秋さんという、僕には勿体ないほどに可愛らしい彼女が出来たのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7002o/

ヤンデレパートナー。

2012年1月6日01時46分発行